入選

「恒例の稲刈り」

鹿児島県　鹿屋市立上小原小学校　六年　　徳田　拓也

小学校に入学し六度目の夏休み、それは同時に僕にとっては毎年恒例になっている母の実家の稲刈りの仕事が待っている。今年も母に促されるまま家族総出で出かけ、太陽が容赦なく照りつける中での作業となった。

「こんな暑い中大変だけど、おまえたちが毎年がんばってくれるからわっぜいか助かるが。じいちゃんたちは年をとる一方やからなぁ。」

と祖父が笑いながら言った。祖父は毎日外で仕事をしているせいか色が黒く、とても力持ちだ。ときには厳しくしかられることもあるが、元気いっぱいの祖父が僕は大好きだ。

「大丈夫、一生懸命がんばるからね。」

僕は、気合いを入れて仕事にとりかかった。

祖父はコンバインでの稲刈りが増える中、少しでもおいしいお米を作りたいと一部の小さい田んぼだけはかけ干しをしている。これは、「馬」という竹と木の棒で作ったものにバインダーで刈った稲の束を一つ一つ丁寧に掛けてカラカラになるまで自然に乾燥させる方法である。

刈った稲を干すのが僕たちの仕事だ。軍手をつけ長そでを着ているにもかかわらず、腰が痛かったり顔や腕・足のそこら中がかゆかったり悪戦苦闘だった。休みたくても稲は次から次へと刈られていく。バインダーで稲を刈っている祖父の顔は真剣そのものだ。

へとへとになったころ、お茶の時間がやってきた。僕はもうのどがカラカラで、誰よりも早くジュースがあるところに行った。冷たいジュースやおかしを食べると、まるで生き返ったように元気になった。

「よし、そろそろ始めようかね。」

という祖母の声で後半戦が始まった。

気温はますます高くなり、汗でびっしょりだったが、この稲が脱穀機でわらと実に選別され、袋の中に実が次々とたまっていく様子を想像すると疲れも吹き飛んでいくようだった。これが、何とも言えないほどの美しい新米として僕たちのお腹を満たしてくれるのだ。

もう一つ、僕には楽しみがある。それは、

「いつもありがとうね。」

と、祖母が一学年上がっていくたびに少しずつ増やしてくれるお小遣いである。祖父はいつもぼくたちのことを優しく気遣ってくれる。疲れたけど、働くことと、それに対してもらえるお小遣いとの二重の喜びを体と心で感じられた一日だった。

祖父母のおかげで僕たちは一年中おいしいご飯を食べることができる。ぼくは全てのことに感謝の気持ちを忘れずに、もっともっと自分にできること、例えば勉強やスポーツ、家の手伝いなどがんばらないといけない。

「じいちゃん、ばあちゃん、いつもおいしいお米をありがとう。また来年も頑張るからいつまでも長生きして元気いっぱいでいてね。」

シナネングループ